佳作

お姉さんになったよ

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校二年　荒木 美侑

「生まれたよ。」

お母さんからの電話で、妹がぶじに生まれたことを知りました。妹がいたらいいなとずっとねがっていたので、とてもうれしくてしかたがありませんでした。

妹が生まれてから五日目に、はじめて会うことができました。体は小さくて、手や足をバタバタとうごかしていました。手をさわってみると、わたしのゆびをぎゅっとにぎってくれました。妹が「これからよろしくね」と言ったような気がしたので、わたしも「こちらこそよろしくね」とにぎりかえしました。

妹が生まれてから、お母さんは一日中おせわにいそがしそうにしています。朝も夜もじゅにゅうや、おむつかえ、家じをしています。わたしがお母さんに何かを話しかけると、

「ちょっとまっててね。」

とつかれた顔でへんじをすることがふえました。わたしは、だんだんさびしい気もちになりました。今までのように、もっとお母さんと話をしたいと思いました。

わたしは、どうしたらこの気もちはおちつくのかなと考えました。そして二つのこたえを見つけました。

一つは、お母さんといっしょに妹のおせわをすることです。手つだいをすれば、お母さんをたすけることができるし、いっしょに時間をすごすことができます。じっさいに、ミルクをのませる、おふろで体をあらう、ないたときにあやすことをやってみました。手つだいながら、お母さんとたくさん話ができたし、妹もうれしそうな顔をしていました。

もう一つは、ねる前の十分間を、わたしとお母さんが話をする時間にしました。一日の出来ごとを話していると、すっきりとした気もちになってねることができました。

妹が生まれて、一ヶ月がたちました。お姉さんになるということは、うれしい気もちだけが大きくなると思っていましたが、さびしい気もちもいっしょにうごくことがわかりました。これからも、妹との時間をたのしみながら、自分の気もちも大切にすごしていきたいと思います。